

【連載】

技術教育研究会と私の歩み

⑨

佐々木 享

原正敏先生の北海道大学への転任 (1970年11月)

北海道大学教育学部には、以前から産業教育という講座と産業教育計画施設があった。その産業教育講座の教授ポストが空き、その助教授に私の大学時代の先輩（というより寮での先輩）である道又健次郎氏がおられた縁で、東京大学教養学部在職していた原正敏先生が教授として招かれた。私としては、原先生の奥様のお体の調子のよくないこと（後にわかったことだが、奥様は俗に脈なし病と呼ばれる難病であった。）が気掛かりではあったが、原正敏先生は日本の技術教育、職業教育研究の発展のために赴任された。大学紛争が厳しい時期であった。

原正敏先生のこと

原正敏先生は、技術教育研究会の場に限り、教育問題についてはいつも臆することなく積極的に意見を開陳される方だった。家庭科必修化の横暴(?)を厳しく糾弾(?)してやまなかったことは記憶に新しい。しかし他方で先生は、ご自身のことについては語ることが少ない方であった。だから、原正敏先生の全体像は意外に知られていないのではないかと思われるので、以下にやや敷衍しておく。

原正敏先生は、小学校から旧制浪速高校（いわゆる7年制高校）の尋常科に進まれたいわゆる秀才コースを歩んだ方で、その高等科から東京帝国大学工学部にストレートで進学された。（わざわざ「ストレートで」と書

いたのは、当時は高校から東京帝大工学部に進学するにはかなり激烈な競争試験をくり抜けなければならなかったからである。）工学部学生だったから戦争に駆り出されることはなかったけれども、卒業は敗戦後だった。

卒業後は雑誌社に勤め、発足したばかりの新学制の定時制高校の理科の教師を経て、私が初めてお目にかかった1959年当時は、都立世田谷工業高校定時制機械科の教師をしておられた。担当は実習だったという。電気科や工業化学科ならとにかく、大学では理屈ばかり習ってきた東京帝大工学部出身の人に機械科の実習の教師が勤まるはずはない。原先生が並みの人でなかったことは、生徒に負けない技量を身に着けるために小企業の機械工場に通われたことである。実技に強くなったことは、後に技術教育の研究者となるについて大きな強みになった。

1960年からは、招かれて東京大学教養学部勤務された。担当は、図学であった。それ以来長く、図学の教師をされる傍ら、技術教育を研究するといういわば二足の草鞋をはかれたわけである。私たちは技術教育の面での活躍についてはいくらか知っている、原先生を専ら技術教育の研究者としての面だけを見てきたわけであるが、しかし、原先生には図学の方面にも少なくない立派な研究業績があることをこの際、強調しておきたい。1976年に北大から古巣の東京大学教養学部へ呼び戻されてからは、再び図学を担当され、日本図学会の副会長、ついで会長も勤められている。

原先生は、日本科学史学会編の『日本科学技術史体系』の「教育」の巻を手はじめに、技術教育史研究の方面で大変緻密なしごとを続けられた。国立教育研究所編『日本近代教育百年史』の「産業教育」の執筆でも重要な役割を果たしておられる。こうした歴史的な研究においても、常に現代の問題を考えるために必要な基本的な観点を大事にされた。この原先生の技術教育研究の面でされてきた大きなしごとについては、私たち後進の者は、もっと謙虚に学ぶ必要があるように思う。

民主的な諸活動も大事にされた。いわゆる東大紛争の頃には、教室の製図板が防御板に持ち出される騒ぎがあるなど、たいへん苦勞されたようであった。

後年、地域の民主的なひとびとに推されて、無所属の狛江市長候補として選挙に出られたことは、記憶に新しい。原先生の誠実さを示唆するできごとだった。もっとも、原先生が立候補するについては、奥様の影響が大きかった。奥様は、前述のように難病で苦しんでおられたから、奥様が反対したのでは原先生の立候補はありえなかったと思われる。実際は奥様が先生の立候補に積極的に賛成されたのだと伺った。自ら難病で苦しんでおられたのに、難病連の運動や地域の国立病院廃止に反対する運動に積極的に参加しておられた奥様にしてできることだった。

ちなみに、原先生の市長は実現しなかったが、その次の選挙で日本共産党員の狛江市長が出現した。

(いまでは時効になった話だが、1975年だったか私にも市長候補にでないかという話があり、不向きだと即座にお断わりしたことがある。)

原正敏先生、北大の教育学部長となる

周囲の人びとの原先生への信頼感が厚いことは、技術教育研究会の人たちがよく知ると

ころである。大学の場合でも同じことで、北大に転任して間もなく、原先生は大学紛争の後遺症があつてその後始末が課題となっていた困難な時期に教育学部長に選出され、その任務を全うされた。

原正敏先生と私の共著

私には、原正敏先生との共著論文がいくつかある。主なものだけでも、雑誌『教育』の1963年1月号と2月号に連載した論文「技術教育の諸側面の歴史的構造」(これは後に教育科学研究会＝勝田守一編『現代教科の構造』1964年、国土社、に収録)、『技術教育と災害問題』(1966年、国土社)、論文「科学・技術の発展と民主教育」(『講座 現代民主主義教育』第1巻、1970年、青木書店)などがある。たんなる分担執筆とか共編著は他にいくつもある。しかしここにあげたものは、たんに一方の者が名前を連ねたとか、たんなる分担執筆ではなく、事前に構想や論点を何回も協議し、分担執筆した後も、結果としては両者がすべての部分に責任を持ち得る程に何回も討議して出来上がったものである。日頃から共通の問題に関心をもっていたこと、研究の進め方に共通性があったこと、などが共著をものすることを可能ならしめたとは私には考えている。それにしても、原先生のように徹底して調べた上で発言される根っからの学究肌の先輩とじっくり論点を深め、ここに掲げたような折々の重要な問題に共通の見解を何回ももち得たことは、おそらく希にみる幸運だった。正直に言えば、これらの共同作業の場合、最終的には納得づくだったにせよ、いわゆる運動論に属する問題については、私の我を通すことがやや多かったかも知れない。

いずれにせよ、共著論文を書くことができる程に深くお付き合いできる方があったことは、幸運だった。(続く)